シリーズ・若者のひろば

田舎嫌いだった私…

今は、上野村が大好き

かじかの里学園
職員　村中　由佳

長野県に生まれ育ち、けれど田舎嫌いだった私が自然の豊かなところで暮らしたいと思うようになったのは、東京での生活が５年ほど過ぎた頃でした。私は食べること、作ることが大好きなので、将来は田舎で元気な作物を育てながら、作れるものは自分で作って暮らしたいと思うようになりました。

東京出身なのに瀬戸内海の小さな島へ渡ってパン職人をしていたり、沖縄の離島の宿で働いていた従姉のお姉ちゃんたちの影響を受け、それに何より、小さい頃当たり前にあった田舎の風景や四季折々の匂い、例えば蛙の鳴き始めた田んぼや遅くまで遊んだ夏の夕方の匂い、そして土が恋しくなったのだと思います。

思えば大学時代にアルバイトをしていたカフェでもたくさんの出会いがありました。日本の農家を応援する！と、国産果実のジャム屋を始めた人や、子どもと一緒の豊かで丁寧な暮らしを色々な形で提案している人、アラスカの農家でファームステイしてきたという人。そんな人たちにも憧れました。

ＯＬをしている間は、職場にいても土に触れたい願望がむくむく湧いてきて、休暇には農家さんへお手伝いに行ったり、沖縄や京都へ独り旅に出掛けたりしました。そこでたくさんの「農」に関心のある人たちに出会い、食料自給率の低下や農薬や化学肥料がもたらす人体や環境への影響、増加するアトピーや喘息、アレルギーに苦しむ子供たち、失われつつある日本の文化や慣習について考え勉強するきっかけになりました。私は、将来自分の子どもには健康でのびのびと育ってほしい。そう考えると、自分にできるのは農業しかない！と使命感のようなものを感じました。

そんな私が未だに農業に携わっていないのは、農業をじっくり学ぶ前に、小さい頃から憧れていた英語を話せる人になりたくて行った海外で、不思議なご縁に出会ったからです。１年半のニュージーランドとオーストラリア滞在中、私はWWOOFという仕組みを使ってたくさんの農家や自給的な暮らしをする人たちのもとでファームステイをして回りました。野菜と果樹、原生林で見事な森のような庭を作った家族や、電気はソーラーと風力で自給し、薪ストーブで料理する家族、月の満ち欠けにならって作

物の力を引き出す農業を営む人たち。植物、動物、人間そして地球がつながっていることを肌で感じながら、人生を楽しむために生きているおおらかな人々に刺激を受けました。

そんな中で「昔来た日本人で、ユカと同じように熱心に農業を勉強していた人がいたよ。今は日本の田舎で子どもと仕事をしているはずだから、探してみると面白いよ！」と１５年前のノートから電話番号と「カズ」という名前を教えてくれた家族がいました。

３月の帰国後すぐ、研修先を探して農業を始めようと思っていたのですが、興味本位でかけたその電話はこのかじかの里学園につながり、そして「４月から女性指導員として一緒に働きませんか。」と言ってくれたのが「カズ」さんこと園長でした。とても驚いたし、本格的に農業に携わるわけではないけれど、子どもとの関わりの中で山村での生活や生きる力を培う経験ができることに魅力を感じ、学園で働くことに決めました。

学園の生活は「生活」ですから、楽しいことばかりではありません。子どもにとっては面倒な身の回りのことを出来るようになっての楽しい体験がありますし、私自身も初めてのことばかりで戸惑うこともあります。けれど私が小さい頃はしたことのなかった焚き火や川遊びに夢中になっている姿を見ると、こういうのいいなぁと心から感じますし、彼らが助け合って家族のようになっていくのも素敵です。

村ではたくさんの方にお世話になりながら暮らしています。年中行事に参加してはお酒を飲み、またかご編みや縄ない、とちもち作りを教わったり。歩いているとお茶飲んで行きな、と声を掛けてくれるおばちゃんたち。人と人とのつながりを感じられる上野村が大好きです。

年が明けて、村での生活は大好きだけれど、やっぱり農業を勉強したい気持ちが膨らんでいます。この先のことは未定ですが、今年も実りの多い年になりますように。

山のふるさと合宿

かじかの里学園

地域に根差した山村留学を目指し１９９２年スタート。のべ２７９名（２００９年６月現在）の子どもたちが参加し、上野村の学校に通っています。

☎0274-59-2137

〒370-1617 上野村大字楢原 229

http://www.atchfactory.com/kajika/kajika@vill.ueno.gunma.jp

主催：上野村教育委員会